

# 一九四〇年代前半における陸軍と出版社の取引 ——改造社を中心として

中野綾子

## はじめに

アジア・太平洋戦争において、出版社や作家たちは国家による厳しい言論弾圧に合い、自由な活動ができなかったというような、ある種のイメージは根強いものがある。近年はこのような茫漠としたイメージとは異なる、より輻輳的な当時の状況を考察する論考が重ねられつつあり、本稿も同様の見地から、アジア・太平洋戦争における陸軍と出版社の関係を考察するものである。

言論弾圧というと書物内容の統制に焦点があてられがちだが、既刊本の扱われ方も重要であろう。なぜなら、出版という営みは刊行される現在進行形の書物だけではなく、これまでに刊行された多くの書物の蓄積のうえに成立しているからである。既刊本が流通するその履歴もまた戦時下の出版を考えるうえで一つの有力な情報となるだろう。

そこで本稿では、出版社と陸軍との書物取引について、その具体的な内容を明らかにすることを目的とする。これまでに岩波書店による陸

軍との取引はある程度明らかになっているが、そのほかの出版社はまだ不明点が多い<sup>①</sup>。では、軍部からの圧力により一九四四年七月には自主廃業に追い込まれた改造社では、どのような取引がなされたのだろうか。出版社との取引は、将兵への慰問品等となり、書物を介した大規模な慰問活動であったと考えられるが、発禁本も数多くあった改造社の刊行物のなかで、陸軍は何を選択し、改造社とどのように関わっていたのか検討したい。

主に参照するのは『山本実彦旧蔵 慶應義塾図書館所蔵 改造社出版関係資料』(以下『改造社出版関係資料』)に収録される「陸軍恤兵部 陸軍需品本廠 納入書類(購買部)」(一九四一～一九四四、三三四、以下「納入書類」)や「入金済請求書綴」(三〇五)等である。とくに「納入書類」は、陸軍と改造社との関係資料をまとめた一六九枚の資料であり、一九四一年から一九四四年までの見積書、請求書、書物リスト等が含まれ、取引の詳細が判明する。

まずは改造社以外の出版社と陸軍の取引や文庫本の慰問品としての重要性を確認し、その後改造社との取引を検証する。熾烈な言論統制

の標的ともなった改造社を視座とし戦時下における出版文化の一端を明らかとした。

なお引用文において、旧漢字は適宜新字体へ改め、改行は「/」で示した。

## 一 慰問品としての文庫本

まずは、改造社以外の出版社による陸軍との取引を確認する。岩波書店や春秋社等の出版社による慰問品としての文庫本の提供は、次のように新聞で報道された。

戦地にもお正月が近い。一般から献納される慰問袋にもこの頃大陸の兵隊さんに喜ばれさうな紙風や羽子板がめつきり増えて銃後の心遣ひが窺はれるが、陸軍省恤兵部ではこんど兵隊さんのお年玉にと二十五万冊の単行本を贈る／岩波文庫の「虞美人草」「大尉の娘」など二十種、改造文庫の「天保赤門党」など五種、新潮文庫の「平凡」等十種、春陽堂文庫の「二万刀土俵入」等十五種の都合五十種類／二十九日朝から荷造りに着手して千二百余箱にをさめ北、中、南支閩東軍の全将兵に発送される（「兵隊さんにお年玉」『朝日新聞』一九四〇年一月三〇日、夕刊、二面）

記事中の出版社四社は、「敗戦までの十余年間は、岩波、改造、春陽堂、新潮の四文庫によって占められた」といわれるほどの主要な文庫であった。とくに岩波文庫は、一九四〇年に二〇点、一九四二年に一〇点の各二万部（計三〇万部）を陸軍へ提供し、文庫本の種類も明

らかである。<sup>5)</sup>

当時、文庫本という形態には、慰問品として積極的な意味が見出されていた。堀口剛は「岩波文庫、または同型の小冊は、カサばらないので殊に戦線向き」であり、「慰問袋に必ずといっていい程、ああいいう小冊を入れるがい」とされたと指摘する。その理由は「高ばらないし、安価であるし、例えその本が受けとった兵隊にむかなくても、誰でも戦友に呉れてやることができる」からで、岩波書店でも文庫帯紙に「慰問袋に岩波文庫」の標語を印刷するなど宣伝がなされた。<sup>6)</sup>

まさに文庫の売上も好調であった。一九三九年の出版界を振り返り本田顕彰は「売行き部数のうへからいつて、第一位を占めるのは、何といつても文庫ものであらう。この方面では岩波文庫が他の追隨を許さぬ成長を続けつゝあるが、新潮文庫、改造文庫も従来の著しい玉石混淆を自己批判して、質的向上を目指してゐることは注目すべきである」と述べる。<sup>7)</sup>

この「自己批判」とは、主にマルクス主義関連や検閲に抵触する可能性の高い内容を文庫から除いたことを意味する。すでに改造社では一九三三年にレーニン（鈴木安蔵訳）『マルクス主義国家論』や小林多喜二『蟹工船・工場細胞』などが発禁となり、<sup>8)</sup>一九三八年には岩波文庫の社会科学部門のマルクス主義関連のほとんども廃刊、それは文学作品にまで及ぶ。<sup>9)</sup>とくに改造社では、改造文庫のうち社会科学部門が三割を占めており、岩波より強く「自己批判」が迫られることとなった。<sup>10)</sup>

改造社は、一九三八年八月に前年の日中戦争開戦後の時局を反映した雑誌『大陸』を創刊し、陸軍からの依頼で火野葦平「表と兵隊」を『改造』に掲載する。<sup>11)</sup>編集者の水島治男が「これでもう大丈夫、天下をとつたようなものだ。上海軍報道部のお目付の下に厳重な検閲を経て送ら

れてくる原稿だから、大本営陸軍報道部の検閲もパスすること請けあい」であると記すように、「麦と兵隊」の掲載は時局に対する迎合的な動きでもあった。

しかし、改造社に対する言論弾圧はやはり厳しく、一九四二年九月には細川嘉六の論文「世界史の動向と日本」掲載により『改造』は発禁となり、細川も検挙となる。その後改造社内では、編集長の大森直道や担当の相川博が退社し、編集部員も総入れ替えとなった<sup>12)</sup>。この発禁騒動は、一九四三年には横浜事件に発展し、中央公論社等の編集者たちの検挙へと繋がる。そして、翌四四年には自主廃業の指示に至る。こうした軍部からの抑圧による改造社の抵抗と迎合が並行する一九四〇年に陸軍との取引が開始されたのである。

## 二 改造社と陸軍による書物取引の概要

本節では、具体的な取引期間や回数、担当部署、納品数等を明らかにする。陸軍との取引に関わる資料は主に「納入書類」に収録され、複数の取引の「見積書」「請求書」「領収書」「売買契約書」や陸軍への「持込検査願」「契約物品持込証」などから、取引の詳細がおおよそ明らかとなる。

まず陸軍より電話や手紙等で打診があり、在庫品から見本を陸軍へ提出、陸軍からの選書によって契約が結ばれ、改造社で見積書を作成、納品と共に請求書を発行し、入金後に領収書が発行されるのが基本的な取引の流れであったようだ。この間に適宜、納品時の検品のための「持込検査願」や納入期限に間に合わない場合の「納入延期願」なども作成される。

資料解説で「納入書類」は「包装用紙に一括され」、計五回の納品が陸軍へおこなわれたとされるが、後述する『改造社出版関係資料』に含まれない「納入書類」等の資料の検討の結果、陸軍との取引は計七回と考える。以下、各々の取引について「表一」改造社と陸軍の書物取引一覧」に基づき説明をおこなう。

まず一回目の取引が、前節で紹介した『朝日新聞』記事における一九四〇年一〇月の納品である。この取引は『改造社出版関係資料』には含まれないが、管見の限り陸軍との初めての取引と考えられ

【表一】改造社と陸軍の書物取引一覧

回数	取引期間	納品先	『改造社出版関係資料』解説	総数（点数）	請求額
1回目	1940年10月	陸軍恤兵部		不明	不明
2回目	1941年8月～1941年11月	陸軍恤兵部	①昭和十六年度分	12万5000冊(10冊)	37375円
3回目	1942年1月～1942年2月	陸軍恤兵部	②昭和十七年一月 臨時注文	1万3400冊(12冊)	3914円
4回目	1942年8月～1943年4月	陸軍恤兵部		10万冊(10冊)	31800円
5回目	1942年12月～1943年1月	陸軍需品本廠	③昭和十八年一月納入分	2万6400冊(22冊)	24120円
6回目	1942年11月～1943年3月	陸軍需品本廠	④昭和十八年三月	1万1000冊(13冊)	11904円
7回目	1943年6月～1944年5月	陸軍恤兵部	⑤昭和十九年三月	5万冊(5冊)	18850円

（「取引期間」には、納品に際した取引期間を資料から判明する限りで示した。）

る。

二回目は、一九四一年八月から十一月までの取引で、資料解説①に該当する。「陸軍恤兵部慰問文庫」(三三四―二)と書かれた書類表紙や見積書、請求書が確認でき、陸軍恤兵部へ一〇点各一万二五〇〇部の計二万五〇〇〇冊を納品している。

三回目は、「陸軍恤兵部改造文庫納品書」(三三四―三四)と題されるもので、資料解説②に該当し、二回目の「臨時注文」となる。<sup>17</sup>そのため二回目の納品と選書に一部重複があり、納品数も一二点で一万三四〇〇冊と二回目より少ない。また二回目や三回目の取引に関連して改造文庫の在庫調査が実施されており、<sup>18</sup>選書の参考にしようとみられる。

四回目は、一九四二年八月からの取引である。四回から六回目までの取引は異なる納品先へ同時並行でおこなわれた。まず四回目は、陸軍恤兵部荏野大尉から「昭和十七年八月廿二日九時電話ニテ受注」(三三四―五九)とのメモが残される。同メモには、書名と納入期日、用紙割当量とその配給日、指定書物の献本依頼が記されている。<sup>19</sup>この取引では、陸軍恤兵部へ一〇点、各一万部で計一〇万部となり、二回目と同規模の取引がおこなわれた。

続く五回目は、資料解説③にあたる。一二点で計二万六四〇〇冊と点数はこれまでより多いが納品数が少ない。<sup>20</sup>これは三回目の「臨時注文」とも異なり、納品先が従来の陸軍恤兵部から陸軍需品本廠となったことに起因する。とくに前出の四回目の取引開始となった電話のメモ書きの隅に「陸軍需品本廠需品科」の村上少尉より「来廠ヲ願フ」とのメモが残されており(三三四―五九)、同時期に恤兵部からの電話経由で需品本廠からも依頼があったとみられる。

六回目は、一九四二年一月から四三年三月までの取引で、五回目より取引開始は一ヶ月早い。納品が遅いためこの順序とした。こちらにも同様に、陸軍需品本廠との取引となり、一三点で一万一〇〇〇冊と納品数もこれまでの点数に比して少ない。<sup>21</sup>さらに、本取引では「納入延期願」を改造社が提出し、需品本廠も「無償延納」を許可している。

最後の七回目は、一九四三年六月から陸軍恤兵部との取引に戻り、五点各一万部で計五万部と、二回目や四回目と同系統の取引となる。<sup>22</sup>また六回目の取引同様に「納入延期願」を改造社が提出し、納品まで一年ほどかかっている。本取引では見積書や請求書のほかに「売買契約書」や「単行本購買条件書」などより詳細な書類が残されている。

以上が改造社と陸軍との書物の取引の概要となる。五、六回目を除く、一〜四、七回目の取引は、陸軍恤兵部を介し、一冊あたり一万部程度での納品である。これは岩波文庫の場合と同じ特徴を持つ。二回目の取引の表紙書類に「慰問文庫」との記載があることから、恤兵部を介した一万部程度の取引は慰問品用だと考えられる。まずは慰問文庫の取引について、次節で詳細を明らかにする。

### 三 陸軍恤兵部との契約

陸軍恤兵部の慰問品としての取引について、七回目に交わされた「売買契約書」および「単行本購買条件書」記載の内容を中心に述べる。陸軍恤兵部とは、一八九四年に編制された戦時に際して恤兵結社・団体に関する事務および寄贈軍需品・献金に関する事務を掌る機関で、常設機関ではなく、戦時もしくは事変に際して、陸軍大臣が必要に応

じて適宜省内に設置するものであった。部内には、長である恤兵監のほか、部員（陸軍佐尉官・定員二（三名）・書記官（下士官もしくはは属・定員二（三名））が置かれ、基本的に出版社による慰問品の発送や製作依頼は恤兵部を経由した。<sup>25</sup>

まず、七回目の取引での「売買契約書」は陸軍恤兵監倉本敬次郎と改造社山本三生のもと「昭和十八年九月十日」に契約がなされた。「契約要領」「提出書類」「契約品ノ製作」「持込納入・期限ノ延期」「延滞減額」「検査」「所有権の移転」「危険負担」「瑕疵担保」「代金支払」「契約解除」「違約金」「認定権及解積権」「債権譲渡」「規格ノ取扱」「裁判所ノ指定」の一九条からなる。これらの契約条件では、規格に基づいて書物を製作、納品し、検査を実施すること、遅滞の場合には減額となるが「災害事変」などの避けられない理由があれば無償での遅延が認められること、正当な理由なく契約解除となった場合には、契約総額の「百分ノ十」相当額の違約金が発生することなどが定められた。さらに「単行本購買条件書」では、規格として「一般市場ニ於テ販売セラル、自己書店ノ製作ニ係ル独特ノモノノミニシテ提示見本同等以上」で、「表紙裏面ニハ甲ノ指示ニ依リ恤兵品タルコトヲ表示スル加工ヲ施」し、「各部ヲ組合セテ十部ヲ以テ一組トシニ組宛結束」しての納入が定められた。

重要なのは「恤兵品タルコトヲ表示スル加工」が文庫に求められた点だろう。「納入書類」内には、朱書で「本書は銃後の国民の熱誠なる恤兵寄付金をもって調製し従軍特兵の慰安のために配布するものなり 陸軍恤兵部」（三三四—一九）と記したメモが残る。陸軍恤兵部からの指示によって製作された慰問雑誌「陣中倶楽部」の裏表紙等にも同様の文言が確認できることから、恤兵品として前述の文言を文庫に

記すように指定があったと考えられる。

また、納品された書物の詳細は【表二】「改造社による陸軍納品書物一覽」に示した。資料解説で「書目に関しては、文字どおり「娯楽」的なものも多くふくまれている」と指摘されるように「娯楽」的読物が多く、とくに恤兵部との取引はすべて改造文庫となっている。

#### 四 陸軍需品本廠との契約

つづいて本節では、五、六回目の納品先である陸軍需品本廠との取引を確認する。陸軍需品廠は、一九四一年「陸軍需品廠令」によって、「陸軍需品（陣中用品、酒保品、建築材料及其ノ他ノ需品）ノ購買、製造、修理、貯蔵及補給ヲ掌リ且陸軍需品ニ関スル調査、研究及試験ヲ行フ」とされ、特に「本廠ハ東京ニ」支廠ハ所要ノ地ニ置かれ、「本廠長ハ陸軍大臣ニ隸シ陸軍需品廠ノ業務ヲ総理ス」るものであった。<sup>26</sup>

需品の定義は「陸軍需品トハ陸軍需品廠令第一条列記ノ陣中用品酒保品、建築材料及其ノ他ノ需品（以上兵器、被服、糧秣、衛生材料及獣医材料関係ノモノヲ除ク）ヲ総称」するとされ、<sup>26</sup> 陸軍需品本廠との書物の取引は、従来の恤兵部による慰問文庫とは異なる目的での調達であったと考えられる。では一体どのような目的であったのか。

一九四二年八月二六日付陸軍密第三二五九号では「酒保用書籍追送ニ関スル件」として、「副官ヨリ陸軍需品本廠長へ」「南方軍酒保用書籍」を、「兵站総監部参謀長ヨリ南方軍総参謀長へ」「貴軍酒保用書籍」として追送するとの通牒がある。さらに付属の「酒保用書籍整備追送区分表」では、「第二十三野戦貨物廠」を「受領部隊」とし「娯楽用書籍（雑誌ハ含マサルモノトス）」「四十万冊」を送ると記される。また

【表二】改造社による陸軍納品書物一覧

1 回目	土師清二『天保赤門党』
2 回目	吉川英治『あるぶす大将』 直木三十五『楠正成』 岡本綺堂『修禪寺物語』 チャーホフ・梅田寛訳『可愛い女』 佐藤春夫『お絹とその兄弟』 菊池寛『慈悲心鳥』『火華』『東京行進曲』『不壊の白珠』『赤い白鳥』
3 回目	吉川英治『あるぶす大将』 佐藤春夫『お絹とその兄弟』 深沢正策訳『マルコポーロ旅行記』 山路愛山『徳川家康(上)』菊池寛『戯曲篇 現代物』『戯曲篇 時代物』『短篇小説篇 現代物第2』 幸田露伴『蒲生氏郷』 ステエファン・ツワイグ、豊永喜之訳『情熱』 ツルゲーネフ、二葉亭四迷『うき草』 宇野浩二『蔵の中』 レールモントフ、梅田寛『現代男』
4 回目	渡辺幾治郎『陸奥宗光伝』 ゲーテ、高橋健二訳『ヘルマンとドロテア』 福地源一郎『懐往事談』 プレスコット、石田外茂一、真木昌夫共訳『ペルー征服(上)』 田部重治訳『ギヤスケル夫人短篇集』 ヘンリ・ウォルタ・ベイツ、大島侃訳『アマゾンの博物学者(上)』 内田魯庵『魯庵隨筆集(上)』『(下)』 斎藤緑雨『みだれ箱』 トルストイ、上田進 訳『セバストポリ戦記』
5 回目	直木三十五『新編直木三十五全集第二巻』『(下)第四巻』『(下)第十一巻』『(下)第十六巻』『(下)第十八巻』 『(下)第十九巻』『雑新歴史小説全集第八巻』『(下)第十一巻』 小酒井不木『小酒井不木全集第三巻(探偵小説短篇集)』 岸田国土『岸田国土長篇小説集第三巻(愛翼千里)』『(下)第四巻(都会化粧)』『(下)第五巻(双面神)』 『(下)第八巻(暖流)』 石坂洋次郎『何処へ』『小さな独裁者』 子母沢寛『松五郎鴉』 獅子文六『遊覧列車』『盗ッ人旦那』 三遊亭円朝『円朝怪談全集上巻』『(下)下巻』 火野葦平『河童昇天』 伊藤金次郎『人物わしが国さ』
6 回目	火野葦平『美しき地図』『幻燈部屋』 高田保『有閑雑記帳』 田中貢太郎『新怪談集実話篇』『新怪談集物語篇』 大坪草二郎『黎明の人々』 宮城聡『ハワイ』 岸田国土『岸田国土長篇小説集第二巻(鞭を鳴らす女)』『(下)第七巻(落葉日記)』『パンヤ文六の思案』 直木三十五、三上於菟吉『相馬大作』 伊地知進『一番乗り』 深田久彌『鎌倉夫人』
7 回目	ダーウィン、内山賢次訳『ビーグル号航海記(上)』 ゲーテ、舟木重信訳『狐ライネケ物語』 福沢諭吉『福翁百話、百余話』 山路愛山『徳川家康(下)』 ホフマン、佐藤新一訳『胡桃割人形と鼠の王様』

備考：「兵隊さんにお年玉」(『朝日新聞』一九四〇年一〇月三〇日、夕刊、二面) および「改造社出版関係資料」内の資料より、最終的に納品された書名を記載する形で作成。

備考にて「昭和十七年七月四日付南総経衣第九一一号請求ニ依ル分」であること、「書籍ノ種類、内容ノ規格ハ整備部隊（引用者注）陸軍需品廠）ニ於テ計画」され、「毎回二〇〇種以上」を選定することとなっていた。また「三分ノ一ハ速ニ残余ハ数回ニ区分シ昭和十八年三月迄ニ到着」すると期間が定められた。

一方、改造社における需品本廠との取引書類には、改造社への「本需第一八三七号 娯楽図書発注ニ関スル件通牒」(三二四—二三八)が含まれる。<sup>(28)</sup>この通牒には、具体的発注内容として「一、品目 娯楽図書（雑誌ヲノゾク）二、価格 恤兵部調弁価格ニ全ジ（定価ノ六掛）一、資材 当廠ヨリ割当配給ス」とあるほか、「細部ニ関シテハ貴社小木曾氏ト連絡済」であると記される。

通牒の品目がそれぞれ「娯楽用書籍」「娯楽図書」であること、さらに改造社による需品本廠の五、六回目の総取引期間は、一九四二年一月から一九四三年二月であり、一九四二年八月に通牒され一九四三年三月までに到着することとされた取引期間と符合する。この点から改造社の書物は「南方軍酒保用書籍」として「第二十三野戦貨物廠」に送られたと見てよいだろう。また「第二十三野戦貨物廠」はシンガポールにて活動しており、改造社からの書物はシンガポールの酒保用であったと考えられる。<sup>(29)</sup>五回目の取引関連の書類には、「奥付に野戦酒保品と印刷」(三二四—一四四)と書かれたメモもあり、まさに野戦酒保用の娯楽図書であったことが裏付けられる。

「野戦酒保規程」によれば「野戦酒保ハ戦地又ハ事変地ニ於テ軍人、軍属其ノ他特ニ従軍ヲ許サレタル者ニ必要ナル日用品、飲食物等ヲ正確且廉価ニ販売スルヲ目的」とするもので、「高等司令部、聯隊、大隊、病院及編制定員五百名以上ノ部隊」に設置された。<sup>(30)</sup>また『軍隊内務書』

では「酒保ニハ聯隊長ノ定ムル新聞、雑誌、遊戯、運動器具等ヲ備付ルコトヲ得」と記される。<sup>(31)</sup>

この点から改造社の追送書物は、酒保での販売品ではなく備付品であったと推測できる。なぜなら、慰問品では文庫本のみで選書だったが、需品廠での納品分は二〇〇〜四〇〇頁ほどの単行本が主であるからだ。一体シンガポールの酒保では、どのような書物が必要とされていたのだろうか。詳細な書名は「表二」改造社による陸軍納品書物一覧にあるが、基本的には娯楽ものであって「娯楽図書」という注目の範疇から大きく逸れるものはない。たとえば、帝国陸軍の将校等の親睦組織である偕行社が文庫に所蔵するために同時期に購入したものと比べても、その娯楽性はあきらかである。<sup>(32)</sup>

ただし、慰問品として送られた改造文庫と比較すると、翻訳作品が一つもなく、探偵小説や怪談が含まれる点でより娯楽色が強まっていると言えよう。たとえば、五回目の円朝怪談や小酒井不木の『探偵小説短篇集』、六回目の田中貢太郎の怪談物などである。さらに、岸田国士の新聞小説など、短篇や文庫といった携帯性を重視した慰問用とは異なる長篇の全集も納品されている。これは、まさに酒保に備付けることから、持ち運びの必要性がなくなったことによる変化だろう。

内地の雑誌では探偵小説の執筆が困難になるなか、海軍外郭団体のくろがね会には、複数の探偵小説家が参加し、軍からの依頼による兵士用雑誌である『戦線文庫』にも探偵小説が連載された。<sup>(33)</sup>一方で、陸軍の要請による兵士用雑誌である『陣中倶楽部』では、探偵小説家の執筆は少なく、執筆があっても注意喚起としての防諜小説が掲載される傾向にある。<sup>(34)</sup>こうした傾向に鑑みると、小酒井不木の探偵小説集などは陸軍からの依頼としては珍しい選書ともいえよう。

さらに、取引途中で差替えとなった書物もある。たとえば五回目の取引では当初石坂洋次郎『江戸っ子の死』を選書していたが、「紙型不明」との理由で『何処へ』へと変更になった。これは「野戦酒保用」の記載を追加して注文分を増刷する予定が「紙型」がなく刷ることができなかったためである（三二四—一四四）。

そのほか、六回目の取引途中の見積書からは、木々高太郎『就眠儀式』、張赫宙『加藤清正』、岸田国土『岸田国土長篇小説集第一巻』が一九四二年十一月十日付で削除となっていることもわかる（三二四—九四）。この削除理由は「見積書」からは不明である。また五回目の取引では、分割納入に関するメモとして「在庫品ヲ希望（函・掛紙ナシデモ可）」（三二四—一四三）との記述がある。この点から、在庫がないために削除されたとも推測することができよう。とくに用紙の配給の遅れにより納品が遅れていたことから在庫品数の多さは重視されたと考えられる（三二四—一八七）。

## 五 用紙特配による出版統制

前節までに、陸軍恤兵部および需品本廠との取引の詳細を明らかにしてきた。つづく本節では、出版統制と関連する用紙特配の問題について検討する。『改造社出版関係資料』の解説にて五味渕が「陸軍への納品を理由にして、用紙の特別な割り当てを要望する慣例があったこともわかる」と記すように、資料には用紙特配を裏付けるものが多く残される。

陸軍からの依頼後、改造社は在庫数調査や用紙算出表の作成をおこなっている。算出表には、一冊あたりの表紙・扉・見開き・函などの

必要用紙量および価格が記され、申請に伴って不足分の用紙を配給する仕組みであったと考えられる。恤兵部と需品本廠ともに用紙特配が実施されたが、戦争末期の用紙不足の影響からか六回目と七回目は陸軍からの配給が遅れ、納品日に間に合わず納入が延期された。

本節で述べてきた用紙の特別配給による改造文庫や改造社の出版物の増刷は、将兵の読物のコントロールだけではなく、同時に出版社の刊行物のコントロールともなったと考えられる<sup>38</sup>。五味渕は一九四〇年以降の（出版新体制）における「時局や国策を当て込んだ類書の氾濫は、個々の出版者の生存をめざした選択と判断の結果に他ならなかった」ことを指摘し、日本出版文化協会による企画届の提出により用紙配給量が定められる制度について、「一定の書式に従って言葉を埋め、審査の基準を先取り的に付度しながら言葉を選び、しかるべき項目立てに則って表現すること自体が、いわば行為遂行的な価値意識の構築であり、身体の規律＝訓練につながる」として、用紙配給による統制を指摘する<sup>39</sup>。

このような用紙による出版物の統制は継続され、一九四三年には次のように国内向けの文庫本の特別用紙配給が実施される。

同じく、岩波文庫や改造文庫などいゆる文庫物のうち特に有益なもの、の増刷を図るため出版文化協会では近く用紙の特別配給を実施し読書人の要求に応える／増刷されるものは万葉集、古事記、日本書紀、日本外史、吉田松陰、葉隠等の古典物廿四種、即興詩人、ファウストその他の外国文学、自然科学関係七種、文化科学関係十一種など教養もの約五十種で岩波書店、改造社、春陽堂、新潮社など各発行所に一万乃至二万五千部増刷用の用紙を配給し三月はじ



めまでには各書店に行き渡るやう手配する（『読書子に良書増刷』『読売新聞』一九四三年一月二八日、朝刊、三面）

一節で紹介した恤兵部へ文庫本を提供した出版社四社が用紙特配を受けており、やはり重要な文庫本として認識されていたことがうかがえよう。さらに同年には娯楽的雑誌の用紙特別配給も実施される。

ペラ／＼の薄い雑誌が多い中で、久しぶりの十一月号の娯楽雑誌が平素の二倍半の厚さでお目見得する、日本出版会では手許に「操作用紙」を保有し、これを必要欠くべからざる書物に配給して出版界を指導、既に辞書出版と健全読物に利用して効果を上げてゐるが、第三回目として生産増強と前線慰問に是非必要な娯楽雑誌に利用することになったものである。／＼これに指定された雑誌は富士、日の出、講談倶楽部、文藝読物、講談雑誌の五雑誌で、編輯計画を厳正審査し、従来の五割方紙を増配する。従つて頁数を約一倍半に厚くし部数も約一割ふえる勘定になる。／＼なほこれらの雑誌は銃後の健全娯楽に奉仕した後、必ず前線に送るやうにし、前線と銃後を同じ読物で結ぶ計画である。（『太る娯楽雑誌十一月号 前線慰問をかね用紙特配』『朝日新聞』一九四三年九月二二日、三面）

この用紙特配による雑誌の表紙には「この雑誌は必ず前線へお送りください」との文言が付された<sup>40</sup>。さらに次に示すように同時期には青年層向けの健全読物へも用紙特配がおこなわれるなど、用紙配給による統制は盛んとなる。

日本出版会は戦ふ工場、農村などの青年層に健全な読物を大量に提供するため、各出版業者推薦の図書二千種のうちから岩田豊雄氏作『海軍』吉川英治氏作『太閤記』をはじめ小説、戦記、伝記、詩を特配、総数二百二十万冊の特別出版を行ふことになった。配給の方法は店頭売りを行はず、全国の畜組、産報、翼賛会、翼壯、青少年団、婦人会などの各種団体を通じて集団購買制をとり、大体九月一杯に全国の希望書名をとりまとめ、十月中旬ごろから配給を開始する予定である。なほこの利益金は、各出版業者からその一部を企業整備資金として寄付する申合せになつてゐる。（『健全読物へ用紙特配』『朝日新聞』一九四三年八月二八日、朝刊、三面）

このように、一九四〇年以降の日本出版文化協会および一九四二年以降の日本出版会による出版用紙のコントロールによる出版社への統制は継続的に実施されてきた。まさに、本稿にて述べてきた一九四一年にはじまる改造社の陸軍との取引は、このような出版統制団体による用紙統制と関連する陸軍による出版統制として位置づけられよう。

#### おわりに

本稿では、改造社による陸軍との書物取引について、その時期や回数、仕組みや納品された書物などをできる限り具体的に明らかにしてきた。とくに、これまで陸軍への書物の提供は恤兵部経由と考えられてきたが、本稿ではほかに需品廠との取引を明らかにした。

この需品廠での書物の納品先がシンガポールであることは、この時期の南方における日本語書物の流通を反映しているよう。一九四〇年以

降、近衛内閣の「大東亜共栄圏構想」による南方への進出計画は、太平洋戦争開戦によって本格化する。進軍とともに日本語書の流通版図は拡大し、一九四三年三月には配給を一手に担っていた日本出版配給株式会社によって「日配南方出張所設置要綱」が定められる。この要綱は「軍官の指導監督の下に大東亜共栄圏新文化建設を理想に日本政府の文化政策に則り、共栄圏全域に亘る日本出版物の適正なる普及並に現地出版文化の向上に協力し以つて諸民族の文化的発展に資するを目的と」したもので、シンガポールをはじめ、香港、スマトラ、ジャカルタなど一二の地域へ配給用出張所の設置が計画された。<sup>41</sup> 需品廠への追送品の納入期限は、この要綱の提示と同じ一九四三年三月であり、まさに一九四三年という時期における南方での日本語書物の整備の進捗を象徴するものとなっている。

さらに、これら取引は用紙の特配を条件として実施されており、一九四〇年以降の出版文化史における陸軍による出版統制の一つとして位置づけられよう。軍部や特高警察から睨まれていた改造社による陸軍との取引は、『大陸』の創刊など改造社が示した戦争への協力的姿勢と同じものと考えられよう。水島は『改造』について「われわれのやっているような雑誌はまずは将来つぶされる運命にある」と考え、「つぶされてから出直すのでは間にあわない」からと『大陸』刊行を社長の本木実彦に進言した。それは「単なる隠れ蓑でも方向転換でも」なく「食いつないで行かなければならない」からであった。<sup>42</sup> こうした発言に鑑みたとき、用紙特配は単なる出版統制だけではなく、出版社側の利益に繋がる軍との共犯関係を指摘することもできよう。

中央公論社から一九三三年に改造社へ移った本佐木勝は、その日記のなかで一九四四年七月に改造社の解散が決まった際、山本実彦が「窮

迫裡に解散するの思うように手当も出せない」と挨拶したことについて、次のように綴る。

窮迫！最近の社の財政は決して窮迫していなかったはずだ。なるほど、当局の紙の統制以来、社の出版活動はほとんど停止状態に近かったが、わが社の大倉庫に山と積まれていた戦前の返品による在庫品は、時局以来飛ぶように売れてしまつて、今は倉庫はガラあきではないか。しかもひと昔前、長い不況のどん底にあえいでいたわが社が、「若い人」（石坂洋次郎）や「麦と兵隊」（火野葦平）で頹勢を一挙に挽回して以来、社の財政の基礎は安定していたはずだ。その上に在庫品の一掃である。社の窮迫とは余りにも見えすいた言葉だ。（一九四四年七月三二日）（木佐木勝『木佐木日記』第四卷 現代史出版会、一九七五年、一四頁）

山本に対する反発心もあろうことから、木佐木の発言をそのまま受け取ることもできないが、少なくとも木佐木は用紙統制と在庫品売上による改造社の経済状態を併せて語っている。この指摘からは、改造社において用紙統制によって自由な出版活動ができなくなる一方で在庫品の販売によって経営が保たれていた側面があったことがわかる。

そのうえ、用紙統制が開始されると徐々に書物の返品率は減少し、一九四三年七月からは書物は売切買切制となり返本は最小限となる。清水文吉が「返品品の減少を目指した適正配給の達成は業界人の悲願であった」と述べるように、返品品の削減は出版社側の要求でもあった。<sup>43</sup> このような時期において数万部もの陸軍との取引は、在庫品を一掃させ、用紙特配によって更なる利益をあげたものと考えられよう。

しかしながら、陸軍からの利益がどれほど改造社の経営を支えるものだったのかは、さらなる調査が必要となる。本稿で用いた『改造社出版関係資料』には、数多くの在庫調査票や売切買切制の注文票が含まれており、当時の在庫状況から利益を明らかにできる可能性がある。さらに、本稿では選択された書物の傾向について、需品廠と恤兵部での違いについては言及したものの、全体的な傾向としては「娯乐的」と述べるに留まった。『改造社出版関係資料』に含まれる在庫調査票などの検討により、今後具体的に選書の基準を明らかにできる可能性がある。これらの調査については、別稿を期したい。

註

- (1) 松本和也『戦争と文学―言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房、二〇二二年、五味測典嗣『プロパガンダの文学―日中戦争下の表現者たち』共和国、二〇一八年など。
  - (2) 『岩波文庫総目録1927-1987』岩波書店、一九八七年、…頁。
  - (3) 二〇一〇年二月、雄松堂出版、資料はDVDに収録されている。以下、『改造社出版関係資料』内の資料は資料番号および必要があれば枝番号を示す。
  - (4) 矢口進也『文庫そのすべて』図書新聞、一九七九年、一四八頁。
  - (5) 岩波書店より陸軍へ一九四〇年に提供された書物は以下の通りである。志賀直哉『小僧の神様』『万曆赤絵』、夏目漱石『虞美人草』、徳富健次郎『黒い眼と茶色の目』、徳田秋声『あらくれ』、泉鏡花『注文帳・白鷺』、永井荷風『おかめ笹』、中勘助『銀の匙』、ハドスン『緑の館』、トウエン『王子と乞食』、ウエブスター『あしながおじさん』、トオマ『悪童物語』、バルザック『知られざる傑作』、メリメ『コロンバ』、ドーデー『陽気なタルタラン』、ジュールジュ・サンド『愛の妖精』、フローベール『三つの物語』、プーシキン『大尉の娘』、アラルコン『三角帽子』、スピリ『アルプスの山の娘』。
- 一九四二年は以下の通り。森鷗外『高瀬舟』、幸田露伴『五重塔』、尾崎紅葉『二人女房』、国木田独步『武蔵野』、島崎藤村『千曲川のスケッチ』、

泉鏡花『歌行燈』、パウル・ハイゼ『忘れられた言葉、ヘッセ『漂泊の魂』、ラファイエット夫人『クレージュの奥方』、スタンダール『カストロの厄』(注二に同じ)。

- (6) 堀口剛『戦時期における岩波文庫の受容―古典と教養の接合をめぐって』『マス・コミュニケーション研究』七二、二〇〇八年、四〇〜五七頁。
  - (7) 本田顕彰『再生版の洪水 今年の出版界への回想(一)』『朝日新聞』一九三九年二月一八日、朝刊、五面。
  - (8) 『日本出版文化百年史年表』日本書籍出版協会、一九六八年を参照。
  - (9) 岩波文庫編集部『岩波文庫の80年』岩波書店、二〇〇七年、四二〜四二五頁。
  - (10) 岡野他家夫『日本出版文化史』春歩堂、一九六二年、三六一頁。
  - (11) 関忠果他編著『雑誌『改造』の四十年 付改造目次総覧』光和堂、一九七七年、一五九〜一七四頁。
  - (12) 水島治男『改造社の時代 戦中編』図書出版社、一九七六年、一四一〜一四二頁。
  - (13) 注二に同じ、三二六頁。
  - (14) 陸軍恤兵部莊野大尉からの依頼の三回目取引では、電話のメモが残される(三二四〜三二五)。
  - (15) 五味測典嗣は、以下の通り五つの分類を説明している。(山本実彦旧蔵 慶應義塾図書館所蔵 『改造社出版関係資料』二〇一〇年二月、雄松堂出版、八五頁)。
- ①「昭和十六年度分陸軍恤兵部慰問文庫 銀座七〇二三局 莊野大尉」。見積書、書目リスト、搬入にかかわるメモ等。
  - ②「昭和十七年一月 臨時注文 陸軍恤兵部改造文庫納品書 九段五五〇〇局 省内二八二二局 「莊野大尉」見積書、請求書、書目リスト等。
  - ③「昭和十八年一月納入分 陸軍恤兵部 「改造文庫」納品書類」受注に関するメモ、見本提出書目、見積書、領収書、売買契約書等。
  - ④「昭和十八年三月了 陸軍需品本廠 納入品関係書類」請求書、契約物品持込証、持込検査願、納入延期願、紙類割当要望書、納入見本提出書目、「娯楽図書発注三関スル件通牒」等。
  - ⑤「昭和十九年三月納入分 陸軍恤兵部 「改造文庫」納入書類」紙類割当願書、受取書、見積書、納期延期願、請求書、領収書、単行本購買条件書、売買契約書。

- (16) 以下、取引に関わる主要な該当書類を示す。三〇五―一八(請求書、一九(見積書)。三三四―二一七。
- (17) 三〇五―一六(請求書、二七(見積書)。三三四―三五(請求書下書き)、三六(見積書下書き)、三七(見積書下書き)、三八―四一。
- (18) 三三四―四二―五七。
- (19) 三〇五―二(見積書)。三三四―五九、六四(見積書下書き)、六五(請求書、六六(領収書)。
- (20) 三三四―一九、二〇(請求書)、二二八、二二九(見積書)。
- (21) 三三四―八二(請求書、八七、八八(納入延期願)、九四(見積書)。
- (22) 三三四―一五四(紙類割当願書)、二五八(見積書、一五九(納期延期願)、二六〇(請求書、一六一(領収書)、一六二(単行本購買条件書、一六五―二六九(売買契約書)。
- (23) 「軍務局、経理局、医務局、人事課より陸軍恤兵部編制の件」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C06021862400。明治二十七年七月「完二七」八年戦役日記(防衛省防衛研究所)、「乙第5号」陸軍恤兵部編制」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C0660011000。明治二十七年「戦時諸編制」(防衛省防衛研究所)。
- (24) 注一五に同じ。
- (25) 「御署名原本・昭和十六年・勅令第八二号・陸軍需品廠令」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:A03022538500。御署名原本・昭和十六年・勅令第八二号・陸軍需品廠令(国立公文書館)。
- (26) 「陸軍需品及陣中用品の定義に関する件」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C01005161900。昭和十六年「陸普綴」(防衛省防衛研究所)。
- (27) 「酒保用書籍追送に関する件」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C01000588600。昭和十七年「陸重密大日記第三七号二二」(防衛省防衛研究所)。
- (28) 「昭和十七年九月五日」の通牒で、そのほか封筒(三三四―一三九、一四〇)、名刺(三三四―一四一)が資料に含まれる。名刺は「陸軍需品本廠陸軍主計少尉村上敷一」のもの。
- (29) 「野戦酒保品整備追送に関する件 南方軍へ」 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C01000829900。昭和十七年「陸重密大日記第五五号一/三二」(防衛省防衛研究所)。上記資料内に「受領部隊第二十三野戦貨物廠(昭南)」との記載がある。
- (30) 「陸達第四十八号」『官報』(三三三三三三三三) 一九三七年九月二十九日。
- (31) 「第二十九章 酒保」『軍隊内務書』琢磨社、一九三四年、八七頁。
- (32) 「偕行社記事」の「社報」欄は、「文庫新蔵図書」として「寄付」および「購入図書」を掲載する。一九四〇年に始まる改造社と陸軍の取引期間と同時期に偕行社へ所蔵された図書の傾向は以下のように確認できる。
- 受贈図書の傾向・偕行社編集部、軍人援護会、東郷会、水交社など、偕行社による刊行物および交流のある各種団体からの定期刊行物等の寄贈が中心。
- 購入図書の傾向・国際文化協会、国際バンフレット通信、社会教育協会、東亜研究会などの定期刊行物や講座ものが中心。個人名が冠されたものは、『山鹿素行全集』(九巻・軍人援護会、一四巻・岩波書店)のみ。
- (33) くらがね会については、石川巧編『海軍外郭団体雑誌「くらがね」復刻版』(全三巻、別巻)金沢文圃閣、二〇一八―二〇一九年に詳しい。
- (34) 『戦線文庫』については以下に詳しい。橋本健午『戦線文庫』について『日本出版史料』(八)、二〇〇三年、一五四―一六七頁。
- (35) 「陣中倶楽部」については拙論を参照。「慰問雑誌にみる戦場の読書空間」陣中倶楽部と「兵隊」を中心に『出版研究』(四五)二〇一四年、一三九―一五七頁。
- (36) 注一五に同じ。
- (37) 三三四―八七、八八(六回目の納入延期願)、三三四―一五九(七回目の納入延期願)。
- (38) 日本出版文化協会による出版用紙による統制については、拙論にて詳説している。「へ柔らかな統制」としての推薦図書制度・文部省及び日本出版文化協会における読書統制をめぐる」『Intelligence』(一五)二〇一五年、一七三―一八四頁。
- (39) 五味潤典嗣「紙の支配と紙による支配」『出版新体制』と権力の表象』『Intelligence』(一一)二〇一二年、一一四―一二四頁。
- (40) 『文藝読物』「講談倶楽部」『富士』三誌の一九四三年一月号表紙には、「この雑誌は必ず前線へお送りください」と記されるのを確認した。
- (41) 『出版普及』三(一六)、日本出版配給株式会社、一九四三年三月二五日。
- (42) 注二二に同じ、四二頁。
- (43) 清水文吉「本は流れる―出版流通機構の成立史」『日本エディタースタール出版部』一九九二年、一三五頁。

《付記》

本研究は「SPS 科研費」19K23050の助成を受けている。「改造社出版関係史料」に陸軍関係資料が含まれる点について五味淵典嗣氏よりご助言をいただいた。また、東アジア同時代日本語文学フォーラム第九回大会の発表では会場より多くの示唆を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。